INTERVIEW：インタビュー

ミュージシャン

田我流（でんがりゅう）さん

今回は気鋭のラッパーである田我流さんにお話を伺いました。田我流さんは，ヒップホップミュージシャン，DJ，俳優と様々な活動をされていますが，ご自身の職業について「遊び人」と表現されます。遊びと表現活動との関係性や地元山梨への思いなどについて熱く語っていただきました。

（聞き手・構成：高橋 辰三，小峯 健介）

── ラップを知ったのはいつですか。

高1かな。

── 日本のですか，外国のですか。

両方いっぺんに。厳密に言うと，中学の頃からちょこちょこ聴いていたけど，本気でやばいと思ったのが高1で，日本だとYOU THE ROCK★という人ですかね。あとはBUDDHA BRANDとか，その当時「さんピンCAMP」という日比谷野外音楽堂での野外ライブに出ていたアーティストに衝撃を受けて。

──「田我流」という名前の由来は。

本名が「田村隆」。クラスメイトにある日，でかい声で，音読みして「デンソンリュウ」と言われて。「うわっ」と思って，俺の名前，ちょっと一文字もじっただけで，日本人のルーツ的な，田んぼと農作民族みたいだと。田んぼに我，流れる。流れるというのは水，フロー。

──「田我流」と名乗ったのはいつからですか。

わりと遅いですね。20歳を越えたぐらいかな。

── 渡米されているとお聞きしました。

渡米したのが19歳ですね。ニューヨークの真ん中ぐらい，ユーティカという町です。マンハッタンはお金がなくて住めず。

── ニューヨークに行く目的は何だったんですか。

武者修行です。

── 音楽のですか。

いや，もう単に武者修行。世界はどれだけ広いのかって見たくて。

── どれぐらいの期間ですか。

2年かな。

── 日本に帰ってきて，すぐにラッパーを目指されたんですか。

初めは漠然と，いつかは音楽で何かすごいものをつくって，それが職業みたいな。あのかっこいいアーティストみたいに俺もやばくなりたいみたいな，そういうノリで曲を作っていって，気が付いたらこうなっていたという感じですかね。もちろん途中で何とかしたいなと思って，フリーターが長かったので。音楽は一生懸命やっていたし，単純にやっぱり楽しかったんですよ。日本全国に友達がいるみたいな環境なので，そういうやつらが頑張っているから，俺も負けられないし。

── ミュージシャン仲間ですか。

そうそう。それがやっぱり切磋琢磨すると，みんなのレベルがどんどん上がっていくから，俺も負けられねえなみたいなのがあって，それが楽しかった。

── 楽曲を作り始めたのは，いつからですか。

高1。

── 最初にCDとして発売されたアルバム『作品集』（2008年）は，何歳のときに作った楽曲ですか。

確か26歳ぐらいじゃないかな。26歳，27歳ぐらいに，俺，何かリアルが詰まっているアルバムですかね。

── 評判の高いアルバムですけど，ラップで出てくるリリック，歌詞というのは，どういうふうに作っているんですか。

時と場合ですね。不思議なもので，何ていうんだろう，俺なんかはシャーマンみたいな。

── シャーマン？

シャーマンが降りてくる。俺を媒体として何かが降りてきて，俺の口から発しているというか，ペンを通じて出てくるという感じに近いかな。出てくるときはすらっと出てくるし，出てこないときは頭でこねくり回すから，つまんない曲になっちゃうんです。

── 書き溜めたりしているんですか。

そうですね。アイデアは残しておくみたいな。町でやばいなと思ったこととかを。携帯をいじって書いているみたいな。

── 作品を作るにあたって，どのようにアイデアが降りてくるのでしょうか。

『B級映画のように2』（2012）を作ったときは，まだ若いし，今はちょっと考え方も変わってきたんですけど。降りてくるに関しては，ひらめきって。あれ，ひらめきってどういう漢字でしたっけ。門に人ですか，そんな感じ。まさに人がいて，あんまり理由がないというか，漢字の雰囲気にすごく似ているなって，ひらめきって。いつ来るか分からないから。非科学的ですよね。超人間的というか，動物的。

── そういうのは高校生の頃から，時折降りてきていたのですか。

そうそう，びしびし。

── 出身や活動拠点が山梨県の一宮町ですけれども，一宮町での音楽活動は長いんですか。

住んで普通に音楽を作って生活をしているという感じですかね。

── 東京で活動していた時期もあるんですか。

2年くらいかな。1回アメリカから帰ってきて，今度東京にでも見に行ってみるかって東京を見に行って，またそこから地元に戻って今という感じですね。

── 地元に戻られた理由，地元への思いというのは，どういうものがあるんですか。

僕そんなにみんなが言うほど，地元最高というタイプじゃないんですよね。ただ何となく居心地がいいというのと，何か調子がいい。

── 以前『B級映画のように2』を出したときのインタビューで，地元を愛する反面，山梨は文化がないと，嫌いな面もあるというようなお話をされていたと思うんですけど，そのあたりどうですか。

やっぱり年を取ってくると，どうでもいいかなという感じになりましたね。自分次第でいくらでも変わるし，ネットもあるし。ただ，イベントに人が入らなくなるとか，町で人が遊ぶ方法を知らなくなってきたとか，やっぱりそういう部分はちょっと感じますね。

アクセスすれば，それは文化に触れられるかもしれないけど，直接的にそこで生み出すという行為は，すげえ減っているんじゃないかなって。集まって，若い人たちがお祭りをやるとか，手作り感があるものが減ってきているんですよね。

── 東京に流れてしまうということですか。

人材は流れるでしょうね。東京の大学に出て，そこから戻ってくるのって，たぶんある程度年がいかないと戻ってこないじゃないですか。もうこの生活が嫌だなとか，やっぱり故郷がいいとか。そうなると，たぶん有能な若者の層というのが，抜けているみたいな。例えば，抜けた優秀な層が県庁に入っていたりしたら全然違うじゃないですか，やることが。町の区画の作り方とか，町をどうしたら未来的に豊かにさせることができるとか。たぶんそういうことを考えられる人間の数が少ない。

── 地元の一宮町の仲間とstillichimiya（スティルイチミヤ）というのを結成されていますけど，どういう方々なんですか。

幼なじみです。全員同級生。

── 甲州弁を使ったラップもされていますけど。

そうですね。みんなで集まると，全員やっぱり甲州弁をしゃべるんですね。山梨だったら，ちょっと汚い言葉とか，結構ニュアンスが面白いのがあるから，そういうのを作ってやろうみたいな。

── 音楽に限らず，これからやっていきたい活動，何かありますか。

いつもと変わらない，このスタンスで，好きなものだけできればいいなって。

── 山梨に住む理由の一つとして釣りのこともお話しされましたが，魅力というのは。

釣りは自然。人間って自然のことをよく分かっていないじゃないですか。農家さんだったら，もっと分かっていると思うけど。東京とかだったら，なおさら分からない。昔，理科の授業で教わったレベルの範疇でしか，たぶん世界のことを知らないと思うんですよ，自然界のことを。例えばなんですけど，釣りって自然と会話できる１つの手段だと思うんですよ。釣り糸を通じてね。何でかというと，気候，水温とかそういう条件もあるし，自分の考えが全部当たって釣れれば，要するに自分と魚のロジックが同じだということを証明できるわけですよ。そうしたときに，自然と会話ができてくるわけじゃないですか。自然とのコミュニケーション。

──『B級映画のように2』に出てくる，ECD（石田）さんと一緒にやった「Straight outta 138」では，SEALDsのデモで，民主主義についての強いメッセージとして「言うこと聞かせる番だ，俺たちが」ってフレーズが使われています。あの曲は田我流さんの作詞なんですか，それともECDさん？

半々です。自分のバースは自分で書くというのがヒップホッパーなので，石田（ECD）さんは石田さんで書いてもらって，たまたま自分が前半作って，これは石田さんにお頼みするしかないなって。面識もなかったんですけど，知り合いを通じてお願いしたら，快くOKしてくれて。

── 政治の問題に切り込んだ歌だと思うんですけど，当時，特に強い思いがあったんですか。

あのアルバムに関しては，結構怒りが原動力だったんです。いろいろなことに対する。年齢が，29歳ぐらいで作った歌なんですけど，ぎりぎりちょっと社会にやっぱりなじめない部分というのがね。摩擦がたぶん，怒りみたいな。社会という構成物質と，一個人の内面にある構成物質というのは，似ていると思うんです。簡単に言ったら個人を拡大したものが世界じゃないですか。人間が集まった社会になって。それを一つ一つ細かくしていくと，結局一個人から始まっているから，一個人の中にある怒りとか喜怒哀楽，あとは心の傷だったりとかトラウマ，そういうのを解き明かすことで，社会全体の問題に切り込めるんじゃないかなというのがコンセプトだったんです。だから自分の内側の嫌な部分というのを，一個一個つぶしていくというか。小説でいったら純文学に似ているのかな。

── 田我流さんが世に広く知れるようになった主演映画『サウダーヂ』や，今年も『バンコクナイツ』が公開になっていますが，「空族」という映画制作集団との出会いは何なんですか。

地元が一緒。富田克也監督と。同じようなことをしている人がいるっていって，たまたま向こうもこっちも面識はなかったけど，映画のイベントに呼んでもらって。

── 富田さんから。

そうです。アップリンクって渋谷にある，ミニシアター的な映画館でライブしないかとお声がけいただき。俺らもちょっと気になっていたから，見たら自分たちの考えていることと同じことを，映画にしている人がいるみたいな。

── それまで演技というのは，意識していたことはあるんですか。

ないです。演技をしたつもりもないです，あの映画は。

── 映画『サウダーヂ』に出てくるUFO-Kは田我流さんそのままと言えば，そのままですね。

そのままです。演技やっても無駄だと思って。そんなの本職の人にやらせりゃいいでしょ。

──『B級映画のように2』というタイトルもそうですが，洋画，邦画問わずサンプリングを含め映画作品への引用がありますけど，映画への思いは。

母親の影響です。僕の家はアンテナの問題でいわゆる民放が見られなかったんですよ。その代わり，衛星

放送は見られて。ずっと映画を親と見ていて，親は映画がすごく好きなんですよ。

おかんが昔，役者志望で，舞台女優か何かに憧れていて，何かそういうのをやっていたけど，挫折したらしくて。でも映画，好きなんですよね。ドラマとかも見ていて，ちょっとこの演技はだめだとか。

── 映画『サウダーヂ』だと，いわゆる少し元気がなくなってきた地方都市である甲府を描いたり，今度は『バンコクナイツ』では日本から堕ちていってタイに移り住んでいる人を描いている作品で，評価が非常に高いですが，映画制作にあたって意見も出し合うのですか。

僕はしないです。呼ばれて行って台本を渡されて，下手すると台本もねえぞ，みたいな感じで（笑）。

── 今回『バンコクナイツ』では，外国のラッパーの方とも交流されていますね。

そうですね，フィリピンの。

── 留学もされていますけど，海外，国際的な活動に興味があるんですか。

みんなやっぱり興味があるんじゃないですか。行ってみたいじゃないですか。でもみんなお金と時間の問題でなかなか行けない。金と時間があればみんな今すぐにでも行くじゃないですか。

── 言葉の壁とかは，ありますけど。

言葉の壁はね，むしろあった方が面白いかなみたいな。直感が研ぎ澄まされるし。

── ラップでしかできない表現って，何かあると思いますか。

ラップでしかできないという表現というのはないのかな。音楽にしかできない表現というのは，あると思います。音に乗せて自分の思っていることを言う，リズミカルに。そこにメッセージと，自分の気持ちがこもる。そうすると人を動かすと思うんですよね。それはやっぱり，音楽特有のものなのかなって思いますね。

── メッセージ性の強い歌を作られていますけど，嫌な思い，嫌な経験ってありますか。

嫌なことというよりも，自分と考え方が違う人間から，「これこれこうだから，お前の考え方はこうした方がいい，お前の音楽は好きだけど，こういう部分が嫌いだ」って言われたことはあるんですね。ただ，別に俺はその人たちに悪い思いを感じたことがなくて，「あくまであなた方はこういう考え方だよね，ありがとう」って書いたら，すごく静かになったんです。それこそ，「お前の考え方を変えたい」みたいなのが一番よくない。みんな自由というか多様性があるから，民主主義だし基本的人権ってそこにあるし。そのために法律があったり。

右から田我流さん，高橋辰三LIBRA編集委員，小峯健介LIBRA編集長

── 弁護士や弁護士会に対するイメージは。

イメージ的には，やっぱり法律のことを勉強して，法律を勉強するということは，システムを勉強しているということじゃないですか。社会がどういうふうに動いているかの。だから弁護士さんが，例えば共謀罪に関してみんな反対だといっている意見を言ってくれたりとか，すごく公平な立場で物事を見ていってくれているような気がするんですよ。そういう人間がいないと困るなと思います。

── 弁護士と弁護士会にメッセージを。

やっぱり世のため，人のために頑張ってもらいたいですね。殴り合いの事件とか，離婚の調停とか，やっぱり人間の悪いところをすごいいっぱい見ると思うんですよね，ダークのところ。そのダークなところに負けないで頑張ってもらいたいですね。

プロフィール　でんがりゅう

山梨県笛吹市一宮町に在住し，全国的に活躍するラッパー。2011年に公開された富田克也監督の映画『サウダーヂ』で主演を務めたことをきっかけに名前が広がり，2012年4月に発表したアルバム『B級映画のように2』でその評価を確固たるものにする。一宮町の幼馴染みと結成したヒップホップグループ「stillichimiya」のメンバーとしても活動する傍ら，山梨の魅力について紹介するシリーズ動画『うぇるかむ とぅ やまなし』を動画配信サービスで共有するなど，その活動は多岐にわたる。